

## 1. 挨拶 PC もウイルスに感染してしまった

「フェイクニュース」・「サイバーセキュリティー」ここ急激に氾濫している言葉です。ロシアのウクライナ侵略で武力による攻撃と併せて騒がれています。何が正しい情報なのか見極める力を持たないと、行動を間違ふことになり予期せぬ結果をこうむることになる。ネット空間で起きているウィルスの問題だけでなく送信元の真偽も把握できる力を持たないとウェブサイトを利用した便利な生活に落とし穴がある。私は今回、「ウイルスの・・・に感染しました早急に解決する必要がある電話050-・・・へ」というメッセージがパソコンを立ち上げた途端に表示されその電話につなぐ以外の操作ができなくなった、仕方なく連絡をとって指示されるまま操作を続けてしまい、その結果完全にロックされパソコンショップに駆け込み対応してもらおうというバカなことを経験した。ウィルス対策ソフトは入っているし、送信元がマイクロソフトでロゴマークも見慣れていたものだったので、少し疑問に思いながらも言われるままになってしまった。「銀行口座が危ないので指示する口座に一時避難のため50万円振り込みなさい、対策したらすぐに戻します」と、そこでやっと気が付き、パソコンを強制終了し詐欺被害は免れたものの修復費用と修理期間が掛かってしまった。知識不足以外の何物でもない。後で確認したらロゴマークが微妙に違っていた。

## 2. 11月・12月・1月の事業内容と2月・3月の予定

状況 年も明けたにもかかわらず、新型コロナウイルスの猛威が巷を震えさせています。

いやなのは、感染者の数よりも死者の数が増えつつあることです、我々基礎疾患を持っている高齢者にとってはまだまだ、気をつけなければなりません。このような中、10月末に計画していたサロンが2月18日に開催されます。また来年度の活動に向けての議論も行う予定です。

### ① 事業の実施及び実施予定

定例会（相談会） 11月、12月、1月は予定通り開催

11月 7日 10日 25日

12月 5日（中止） 8日（5日のメンバーと合同開催）

1月 25日 27日

2月 6日 9日 22日 24日

3月 6日 9日 22日 24日

拡大相談会 2月18日（土） 15:30～ 岩手県公会堂

会の運営方針について議論、

シニアの会サロン 2月18日(土) 13:00～ 岩手県公会堂

講師 P.O.イノベーション 代表取締役 見木社長

会報 9号発行(12月1日に発行) 10号発行(2月1日に発行)

補助金関連 来年度の補助金の申請は行わない事が役員会で決定されました。

従来であれば、1月初旬に提出しなければならぬ補助金申請書関連の作業なし

### 3. 会員紹介

今回の会員紹介はお休みします

### 4. コラム 『義経北帰行伝説の痕跡を訪ねる』

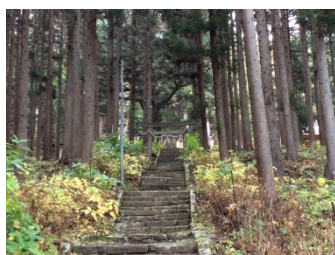
皆さんは、「スーパースター」と言って誰を思い出しますか？二刀流で名を馳せた大谷翔平選手、はたまたNBAのマイケルジョーダンやマジックジョンソン、あるいは歌手の矢沢永吉とだと答える方がいるかもしれない。しかし日本には、「超スーパースター」がいたことをご存知ですか？それは「源義経」です。日本には古来判官鼻肩(ほうがんびいき)という言葉がある。この意味は、第一義には人々が源義経に対して抱く、客観的な視点を欠いた同情や哀惜の心情のことであり、さらには「弱い立場に置かれている者に対しては、あえて冷静にならずに、同情を寄せてしまう」心理現象を表している。判官(はんがん)とは朝廷の官位で、源義経が授かっていたものである。また判官鼻肩という言葉は室町時代末期



【北帰行伝説の痕跡】

から江戸時代初期にかけて成立したとされる。特に当時の江戸っ子にとって、源義経は日本における「スーパースター」の草分けであり、それが今でも続いているようだ。さらに岩手では「義経北帰行伝説」がまことしやかに語り継がれている。源義経は実は生きていて、平泉から遠野、大槌、宮古などの三陸沿岸をへて八戸へ、さらには青森から十三湊をへて北海道に逃げ延び、あげくには北海道から中国大陸に渡りチンギス・ハーンになったという伝説である。そして岩手や、青森には、義経の痕跡が数多く残されていて、その痕跡を巡るツアーコースまで設定されている。歴史上では義経は1189年、頼朝の追及を受けた奥州藤原氏の四代泰衡に攻められ、平泉で妻や娘とともに自害して果てたことになっている。しかし、北帰行説では、平泉で果てたのは義経の影武者であり、平泉から住田町、遠野を経て大槌町、宮古市、久慈市、八戸市、青森市、十三湊から北海道に渡ったことになっている。ところで、義経が生き延びて北へ逃避行したという根拠は多々あるとされているが、今回詳細は省くことにするが、有力な説を一つ、平泉で亡くなったのは義経の影武者

であったという説である。義経には同世代の従兄弟に当たる人物がいて、姿かたちから義経の影武者として平泉で亡くなったという事らしい。影武者は当時の武将にとっては常套手段の一つとなっていた事は言うまでもない。今回は岩手の中でも義経の痕跡が最も多く、3年以上も隠れ住んでいたとされる、宮古市を訪れた。宮古には義経に関する痕跡や言い伝えが数多く残されている。「鈴ヶ神社（すずがじんじゃ）」は、義経の愛妾・静御前の屋敷跡で、難産の末、命を落とした静御前をしのび建立されたと伝えられている。「日向日月神社（ひなたにちげつじんじゃ）」は義経一行が参拝した神社と言われ、義経と静御前との間に生まれた子とされる佐々木四郎太郎義高が祀られている。「判官稲荷神社（はんがんになりじんじゃ）」は、黒森神社に潜伏していた義経一行が状況偵察のため訪れた神社で、一行が黒森神社を後にする際に甲冑を埋めた地とも伝えられていて、義経が祭神になっている。「横山八幡宮（よこやまはちまんぐう）」は、義経一行が参詣に訪れ、宿泊したとされる神社。家臣の一人、鈴木三郎重家は老齢のためここに残り、名を重三郎と変えて横山八幡宮の神主となったと言われている。「黒森神社（くろもりじんじゃ）」は、古くから漁業・交易を守護する神社として信仰されていて、黒森神社のある黒森山は、その名が示すように、山が巨木に覆われ、うっそうとして「昼なお暗い山」だったという。義経一行は3年3ヵ月にわたって黒森山に籠もって行を修め、般若経六百巻を写経して奉納したと伝えられ、「黒森」は、義経の「九郎森」から転じた名であると言われている。「久昌寺（きゅうしょうじ）」は源氏の一族である源義里がここに居を構えていて、義経一行が立ち寄ったと言われている。この中で「判官稲荷神社」と「黒森神社」を実際に巡ってきた。最初に「黒森神社」を訪れた。宮古の「魚菜市场」からさらに100mほど進むと大きな看板が出ているのですぐにわかる。看板を右折して山に入っていく感覚的にはかなり山奥に分け入った感じであった、黒い森というとドイツのグリム童話の舞台となった「シュヴァルツヴァルト（黒い森）」を思い出すが、とにかくうっそうとした山奥であった。この黒森神社はいつ頃建立されたかは定かではないが、発掘調査により奈良密教時代（8世紀）の



【黒森神社参道】



【黒森神社本殿】

ものとされる法具が出土したことからそれ以前に建立したものと思われ、古代から地域信仰の拠点であった事が伺える。またこのことにより義経が潜伏したことについての時代考証は整合性がとれることにもなる。次に訪れたのは判官稲荷神社である。場所は小高い山頂のような場所にあった。すぐ隣にある常安

寺に車を止めさせてもらった。そこから歩きで写真の参道に行き、そこから急な階段を上ってやっとたどり着いた。ここは義経一行が偵察のため訪れた場所で、確かに宮古の街の状況が見渡せる場所になっていた。この神社の御朱印は有名らしいが、常時発行しているわけではなく、期日限定でもらえるようで、希少価値があるようだ。このように義経の痕跡がいくつも残っていると、本当に義経は生きて北帰行したと疑う余地がないのではと思うのは筆者だけであろうか。宮古にはまだ多くの痕跡が残っている。三陸地方の人達だけの歴史ロマンではない何か得体のしれない憑き物が乗り移ったような感覚に陥ってしまった気がする。義経の言い伝えが、これだけ語り継がれていること自体不思議である。そしてこのような痕跡が、三陸沿岸を八戸まで続いていて、八戸から今度は西に移動して十三湊までの青森ルートになっていく。竜飛岬にも「義経寺」という義経の痕跡が残されていた事を思い出した。みなさんも、歴史ロマンを求めて、義経の痕跡を巡ってみてはいかがでしょうか？



【判官稲荷神社参道】



【判官稲荷神社本殿】

## 5. 新たな会員の募集について

新規会員の紹介をお願い致します。会員増は会員の皆様の人脈だよりです。

本会報を使っても構いませんので、お知り合いの方へのお声かけお願いいたします。

連絡先 事務局 志田満

携帯 090-2791-1803 e-mail [mitshida.1029@docomonet.jp](mailto:mitshida.1029@docomonet.jp)

## 6. 編集後記 「ナメタガレイ」について

三陸沿岸で育った者にとって、「ナメタガレイ」の煮付は、年取り魚で大晦日には欠かせない御馳走であった。てっきり海の地方の習慣かと思っていたが、盛岡などの内陸でも食べられていて、年末になるとスーパーなどでもよく見かける今や高級魚である。12月にナメタガレイを求めて釣りに行くことも恒例になっている。調べてみるとナメタガレイを年取り魚として食べるのは、宮城県と岩手県の沿岸部が中心のようだ。この風習はいつ頃が起源かという、伊達政宗が千代藩主だった頃で、それまでの年取り魚はタラだったようだが、タラの漁獲量が激減し、それに代わる魚としてナメタガレイになったようだ。ナメタガレイは冬場が旬で、産卵時期にもあたり、またサイズも大きくなることからのようだ。実は筆者も60cm弱のナメタガレイを釣った事が釣りキチになった要因

でもある。冬場のナメタガレイは子持ちであり、また卵が黄金色に見えるという事で、子孫繁栄、商売繁盛を願う縁起物として重宝されているようだ。昨年末の釣行では残念ながらナメタガレイは釣りあげることが出来なかったのもので、スーパーで調達した切り身で作った、ナメタの煮付で年を越した。今年こそは自前で釣りあげた 45cm のナメタで年を越したいものである。 (志田)